The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Money-Kyrieの“misconception”に関する一考察
Author(s)	西村, 理晃
Citation	大阪大学教育学年報. 2003, 8, p. 255-268
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11307
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学教育学年報 第8号（2003年）
Annals of Educational Studies Vol .8

Money-Kyrleの“misconception”[1]に関する一考察

西 村 理 晃

【要旨】

心理療法の重要な作業の一つに〈クライエントの“考える機能”を高めること〉が挙げられる。殊に精神分析においては、精神機能における認識論的次元（思考thoughtや思考することthinkingについて探究する次元）についての探究が行われて以来、その作業が重要視されてきた。本論では、その“考える機能”について、認識論的次元からの精査の試みに新たな視点を投じるため、Klein派精神分析家であるMoney-Kyrleが提示した“misconception”という概念に注目し、元々曖昧なままにされていたこの概念について、先行研究の吟味、及び事例による考察を交えながら、概念内容の明確化を図り、その概念の有用性を訴えた。misconceptionとはいわば、大方の人間においてその精神機能の根幹に存する、歪んだ“考える機能”である。それは誤った認識、誤った考えを産出する、“歪んだ思考装置”と呼べるかもしれない。クライエントの深遠な心を探究する心理臨床家にとって、クライエントの援助の点でも、自己を省みる点、特に自身の“考える機能”を把握する点でも、misconceptionは非常に有効かつ重要な概念ではないかと思われる。

1．はじめに：misconceptionとは如何なる概念なのか？

“misconception”とは、Money-Kyrle(1968）によって、提言された概念である。ただ、正確に述べるならば、彼はmisconceptionを新概念として扱わなかった。代わりに、彼はこれを精神分析における認知的発達を精査する際に有効な概念として扱い、当概念を発案した主題であった彼の精神分析的な「認知的発達」理論を詳説する際に言わば二次的あるいは三次的に生み出し用いたのである。その彼のmisconceptionという概念に、精神分析における有効性を認め、新たな精神分析理論としての力を見出したのはMeltzer（1981）である。けれども、そのMeltzerにおいても、その重要性は叫ばれながら、その性質は明確に定義されることはなかった。ただ、後述するが、MeltzerはMoney-Kyrleのmisconceptionを検討するにあたり、非常に重要な視点を投じている。

その後、Caper（1998)、松木（2002）らがMoney-Kyrleの当論文に着目し理論展開をはかった。Caper（1998）はMoney-Kyrleの論文（1968）を参考にしながら、精神分析における「精神病理と原始的精神状態」についての独自の理論を展開している。一方、松木（2002）はMoney-Kyrleのmisconceptionの概念自体を重視し、それをBion理論との関連で発展させ、独自の理論である「陰性アルファ機能」を提示した。しかし、両者ともに、その理論形成過程において、misconceptionの内容自体を特に明確にするという作業は行っていないようである。

以上のようにmisconceptionは特にKlein派の精神分析理論の発展において重視された概念であるが、misconceptionとは如何なる概念かを明示することに関しては、筆者の知る限り現時点においては曖昧なままにされているようである。Money-Kyrleのmisconceptionとは如何なる概念なのか、Meltzer、Caper、松木は何故そこに着目し、新概念としての力を認めたのか、以下本論にてmisconceptionという概念の内容を精査し、その有効性、重要性を検討していく。

2．精神分析の認識論的次元：“考える機能”

(1)Money-Kyrleの認知的発達理論

Money-Kyrleは「認知的発達」を理論提示するまでの、自論の変遷を次のように示している。

第一段階（40～50年前）：「精神病理は性欲の抑制の結果である」

第二段階（20～25年前）：「精神病理は無意識の道徳的葛藤の結果である」
第三段階（現在）：「患者は、臨床的に病理であるかどうかに関係なく、無意識のmisconceptionや妄想に苦しんでいる」（Money-Kyrle1968 p691）

「認知的発達」理論は彼の患者の根本的な問題を追求する彼の試みの深化の到着点として位置付けられるだろう。つまり、彼の理論発展における第三段階は、第一段階、第二段階を内包するものとして捉えることができる。この流れは、Money-Kyrle含めてKlein派精神分析に特に顕著なものである。Klein派においては、Bion（1962b,1963,1965,1970）の思考についての理論的展開をみて以来、精神分析の目的の一つに思考機能の発達、Money-Kyrleによれば「認知的発達」が重要視されることになった。現代Klein派における転移―逆転移の理解、投影同一化の理解、転移解釈の理解は大きくここに依拠している。精神分析における「認知的発達」の側面の位置付けをここでおさえておくことは、後に続く論の展開にも必要であると思われるので、以下に説明を加えたい。

(2)精神分析理論の次元

Meltzer（1976）によれば、深層心理学としての精神分析は6つの次元を内包しており、それは次のようになっている。[(1)構造的次元(2)力動的次元(3)経済的次元(4)遺伝的次元(5)地理的次元(6)認識論的次元]

各次元についての説明はMeltzer（1976）の論文に詳しいので、そちらを参考にしてもらうことにし、ここではその内容を端的に示してみる。まず、構造的次元とは、自己のパーソナリティ構造に着眼する次元のことである。二番目の力動的次元とは、つまり個人の受ける精神的苦痛をどのように調整し、修正し、あるいは避けていくかのメカニズムに着目する次元である。三番目の経済的次元とは、精神的苦痛のメカニズムの背景にある経済的過程に注目する次元であり、その際、反復強迫や〈快感原則―現実原則〉、〈妄想分裂態勢―抑うつ態勢〉が特に考慮される。四番目の次元は、遺伝的側面に注目する次元である。五番目の次元は、個人の「生きる空間」（Meltzer1976）に注目する次元で、内的世界、外的世界、内的対象、外的対象などが問われる。6番目の次元は後に詳述するので、ここでは説明を省く。

この精神分析の多次元性は、元来、精神分析、その適用対象の中心概念として設定している人間の精神的苦痛の理解のために広がったという背景を持っている。Meltzer（1976）によれば、精神的苦痛についても特にKlein派においては3つのカテゴリーに分けて考える。それは、“迫害的なもの”、“混乱的なもの”、“抑うつ的なもの”、の3つである。迫害的精神的苦痛とは、自己存在を根源から脅かす苦痛として言及され、混乱的精神的苦痛とは、考える能力や機能を脅かすものとして示唆され、抑うつ的精神的苦痛とは愛する対象を脅かすものとして示される。Meltzer（1976）によれば、精神分析の多次元的理解は、そのような精神的苦痛がどこから生じるものか、誰が抱いているものなのか、根本的には「この苦痛は誰のものか？」（Meltzer1976 p389）などの問いに対する探究の過程に生まれた。

この観点に従えば、精神分析は上述の6次元で人間を理解しようとする技術ということになる。そして、６次元の中でも認識論的次元は、精神分析においては、重要かつ本質的な次元とみなされている。

(3)認識論的次元におけるMoney-Kyrleの「認知的発達」

精神分析における認識論的次元の探究は、misconceptionの重要性を説く際だけなく、現代Klein派の精神分析理論を理解する上でも非常に重要なものである。その探究はFreudに萌芽を見、Kleinによって臨床的な重要さを見出され、Bionによって技法としても、理論としても確立されることになった。この認識論的次元を換言すれば、“経験から学ぶことを探究する次元であると言うことができる。それは、特に人間の考える機能のあり方、その機能そのものを探求する次元である。Bion（1962b）は、人間は“経験から学ぶこと”により、考える機能を発達させ、様々な人格要素を獲得していき、成熟した人格を形成すると述べた。この見地は、心を認知的側面と情動的側面にわける従来の心理学の基本的枠組みを揺るがした重要なものである（平井1999）。Bionは心の認知的側面、特に考える機能を人の情動もしくは情念の中心的構成成分として捉えたのである。人はこの考える機能によって、精神内に生じる情動、精神的痛みを、考え、

包含し自らのものとして経験することで、心の成長を遂げることができる。認識論的次元の探査、探求（心理学的な側面での考える機能の探求）は、精神分析に限らず殆どの心理療法に共通する根本的な側面であるということができるかもしれない。

Money-KyrleはBionと同時期、Bionの影響を受けて、この次元の精神分析的探究を行った。そして、その結実の一つが“認知的発達”の理論であり、misconceptionという概念であった。彼の理論変遷において特徴的なのは、理解する対象を精神病理をもつ患者に限定せず、精神分析対象となるあらゆる人間の病理的側面の理解は、“認知的発達”の側面の探究なしには成り立ちえないと強調しているところである。彼は、病態に関係なく認知的発達の歪みは誰にでも存在するものであり、それは早期乳児期に、つまり心が作り上げられるときに生じた歪みであるため、病態が軽い場合は非常に見いだしにくいという。しかし、精神分析を行うのであれば、分析家は分析過程の中で、その思考機能の根元部分の歪みを見いだし、患者と共に考えていく必要があるとMoney-Kyrleは論じた。ここで、認知的発達の歪みと呼んだもの、これがmisconceptionであり、Meltzer（1981）によれば精神分析の重要な対象ということになる。

3．misconceptionの形成

先述にもふれたように、misconceptionは認識論的次元の理論であり、その理論的基盤を、人間の原初的な心の状態、早期乳児期の内的世界に置いている。したがって、misconceptionに対する字義どおりの意味、つまり単なる「誤解、誤った考え」を示すわけではない。もっと、心の根幹に迫るレベルの、見方によれば、人間の心の構造について根底のところで影響を及ぼすようなものを示している。

Money-KyrleはBionに従い、人間は生得的にいくつかの前概念作用というものを潜在的に有していると述べている。Bionによれば、そのなかの一つに心理的な経験をしていく能力があり、彼はこれを前概念作用preconception（Bion1963）と呼んだ。「これは期待の状態に相当する。それは限られた範囲の現象を受容するために適応した心の状態である。その早期の表れは、乳児による乳房の期待かもしれない。前概念作用と現実化は結びついて、概念作用conceptionを生む」（Bion1963,訳書139頁）[2]。換言するなら、人間は未経験の経験を期待するという能力を備えていることを示している。例えば、赤ん坊において、生来的に持っている乳房概念の可能性が、母親の乳房に出逢うことによって、乳房という概念として形成されることになり、そのため赤ん坊は乳房を空想でき、思考できるということになる。したがって、このような前概念作用は、現実がその期待に応じてくれる、つまり現実化されるのを待ち、それが概念作用、概念を生み出していくのである。この過程により、人間は、思考や思考することを発展させていく。

Bionは、精神病はこの思考の生成過程に障害をもつとし、その思考障害のメカニズムを追求していった。そして、幻覚の形成過程や、心の機能の破壊について、思考障害の側面からその原理を探究していった。前概念作用の側面から、思考障害のメカニズムについて端的に述べると、次のようになる。つまり、乳児はその前概念作用により、期待するものを求める。多くは乳房である。しかし、何らかの原因（乳房のない環境、乳房を求めない乳児自身）により、乳児はその期待に添う対象物、つまり乳房を見出せないことがある。このとき、期待に応じるのは、乳房ではなく“不在”となる。この状況が続けば、前概念作用の現実化は成されず、概念作用は生成されることはない。結果、乳児は考える材料（つまり乳房という概念）をもたないばかりか、考えることさえ適わなくなってしまう。場合によっては、その過程で生じる迫害的不安により、幻覚を生み出すことがある。

Money-KyrleはBionの述べる上記の過程の探査を試みた。思考や思考することの形成過程、特に前概念作用の現実化の過程に着目したのである。ただ彼は、Bionのように重篤な精神病の患者に注目したのではなく、それよりももっと混乱の軽い患者にこの思考の形成過程の障害の存在を指摘した。つまり、迫害不安にさいなまされる精神病レベルの患者に対する理解に限らず、抑うつ不安に耐えられないより混乱の少ない人間を理解する上でも有効であることを示したのである。これに依れば、殆ど全ての人間がこの思考過程の障害をもつと想定できるようになる。misconceptionはそのような人間の認知的側面を理解するうえで重要な概念となる。

Money-Kyrleはmisconceptionについて、前概念作用により期待しているものと程よく合致するものが乳児の経験する現実（心的現実）には見当たらない場合に生じるとして描いた。当該の例の場合、乳児にとって、経験する現実は、前概念作用により期待するものに対して歪んだものを提供する現象として経験される。その結果、乳児は歪んだ概念を生み出す概念作用を内在させることになってしまう。たとえば、虐待的な環境におかれている乳児を例に挙げてみよう。乳児は乳房（ミルク）を求めているのだが、母親の対応として暴力的な行為が混ざった乳房（例えば、暴力的に哺乳瓶を乳児の口に突っ込むという行為）が返ってくるとする。これは、乳児が求める“乳房”ではないのだが、乳児は生き残るために、それを乳房として心的現実では経験するかもしれない（misconceptionがつくりあげられる）。そうすると、その後、乳児が乳房を求めるとき、この経験に基づき、暴力を伴う乳房を求めるようになるのかもしれない。さらにこれは、乳児がその後、愛情を求めるときに、暴力を伴った愛情を愛情として経験するようになる、つまり、相手の暴力を喚起させるような形で、人間関係を結ぶことになる可能性を導くかもしれない。この現象をあらわす乳児の根底に働くもの、これがmisconceptionである。ここで生じる現象は、misconceptionが歪んだ思考内容を生み出し、それを思考するために生じる悪循環である。程度の差こそあれ、この現象は殆どの人間に生じている。

4．Meltzerは何故、Money-Kyrle以上にmisconceptionを重視したか

上記のように、Money-Kyrleは殆どの人間の精神内にmisconceptionが心の原初的レベルにおいて生じていることを示したが、それを概念化することはなかった。Meltzer（1981）はmisconceptionを精神分析において非常に重要な発見であるとみなし、概念として用いられる必要があることを強調した。「これ（misconceptionの概念）はとても新しい理論であり、母—子（アナリスト—アナリザンド）の相互関係のプロセスの探究の道を開く。この理論は我々にある既存の理論がもつ記述力を超えたものを有している」（Meltzer1981 p498）。ただMeltzerも、多分にMoney-Kyrleに敬意を払って、misconceptionについて、Money-Kyrleと同様に、概念内容を定義することはなかった。しかし、上記が示唆することから、misconceptionを位置づけるに、それはBionの提示した「概念作用」に対応する概念であると位置付けることができる。Bionは『変形』の中で、misconceptionの存在を示唆するにとどめたが（1965邦訳152頁）、Money-Kyrleはそれについての探求を図り、人間の認知的発達におけるその重要性を探査したのである。
明快にすることが賢明か愚か判断しかねるところであるが、本論では、この流れにしたがって、以下、misconceptionの概念の明確化を図ることにする。

5．misconceptionとは

Bionによれば概念作用とは、人間が生得的に持つ前概念作用が外界との関係の中で、適当な現実化が成されると、生み出される「装置」（1962b邦訳108頁）である。概念作用は様々な概念を生み出す思考装置ともいうべきもので、これによって、人間は考え、経験から学ぶことができる。Bionによれば、前概念作用は適当な現実化を遂げ、概念作用を生み出し、生み出された概念作用はそれにより何かを期待する、つまり新たな前概念作用として働く。この繰り返しにより、概念作用という「装置」は次第に成熟していき、人間は成熟した思考が可能となってくるのである。Bionはこの「装置」を♀—♂モデル（コンテナーーコンテインドモデル）として抽象化させている。

単純に考えれば、この過程の歪みがmisconceptionを生み出すことになる。ここで重要なのは、misconceptionは「装置」として精神に内在することである。つまり、外界が前概念作用に全く触れないほどの悲惨なものとして捉えずに済む程度であるかぎり、心が破壊されてしまうほどではないがそれに近い精神的苦痛を経験する場合、人間は（精神的に）生き残るためにそのような状況の中で、生得的な前概念作用をその歪んだ環境の中で現実化してしまい、misconceptionという装置を創り上げてしまうのである。人間がそのような過酷な精神的苦痛の元でも生き残るために、誤った形で現実を体験する、ここに

misconceptionが介在している。概念の歪み、思考内容の歪みを生み出す、思考の「装置」を内在化し、作動させることで、人間はそのような過酷な精神的苦痛を回避、あるいは軽減し、生き残るのである。misconceptionを概念作用に比して、抽象化すれば、misconceptionとは、“歪んだ♀－♂”ということができる。それでは次に、その歪んだ「装置」の性質を検討してみよう。

Money-Kyrle, Meltzerによれば、その装置は“過剰な投影同一化”[3]を使用することになる。これに従えば、misconceptionは過剰な投影同一化を用いて、経験する現実を、自らの内的世界にとって苦痛ではないように操作し、認知させる一つの精神内システムと喩えることができるだろう。さらに、ここでMoney-Kyrle、およびCaperの論文を参考にして、“展望の反転reversal of perspective”と“無意識的幻覚unconscious delusion”を加えておく。この二つは機構としては、投影同一化で説明可能であるが、より原初的な心の部分で生じる現象を探査できる概念である。この二つについて、少し説明を加える。

Bion（1963）によれば、展望の反転は、苦痛や成長、変化を回避するために用いられる（訳書172－175頁）。苦痛、成長、変化の回避は人格に静的な状態をもたらすと同時に、無意識的幻覚を生じさせることになる。経験する現実を、展望の反転により、例えば悪い体験を良い体験として置き換えたり、暴力を愛情として置き換えたり、そうすることで現実がもたらす苦痛をコントロールしようとする無意識的な機制である。このような機制が作動するところには、misconceptionが存在しているといえる。

次に無意識的幻覚について。これは、misconceptionの影響により作り出される無意識的空想と呼ぶことができるかもしれない。Klein派の考えによれば、人間は無意識的空想を外界に当てはめることで現象を経験することになるのだが、抱いている根源的空想が無意識的幻覚と呼べる無意識的空想である場合、経験する現象は現実と疎隔されたものになる。これは、ある側面においてFreudが一次的ナルシシズムと呼んだ乳児が体験する精神状態に類似するといえる。一次的ナルシシズムにおいては、乳児はある種の万能的空想により外界を経験し、それによって、外界をそのまま知覚することによる精神的苦痛からわが身を守る。その意味で、無意識的幻覚は無意識的万能的空想と捉えることもできるだろう。misconceptionという装置は、精神内に無意識的幻覚を生み出し、それを基に、現実を経験させようとするのである。

以上をまとめるならば、misconceptionという「装置」は次の防衛機制を特に使用することになる。〈①過剰な投影同一化②展望の反転③無意識的幻覚→非現実的な万能的空想，万能的無意識的空想〉。misconceptionという「装置」が精神内で働くことにより、無意識的な幻覚（例えば無意識的万能感）が生まれ、抱えきれない精神的苦痛を過剰な投影同一化により処理することができるようになる。その際、代償となるのは、変化の可能性、発達の可能性であり、人格はその装置が働いている程度において、それらを犠牲にしているのである。言葉を変えれば、misconceptionという「装置」により精神的苦痛を軽減できる一方で、“経験から学ぶこと”の障害が生じうることになるのである。

Meltzerも述べるように、Money-Kyrleの理論の価値の一つは、misconceptionの存在を、精神病レベルと呼ばれる人だけでなく、広く、極論すればあらゆる人間にその存在の可能性を認め、それに注目していく必要があることを訴えたところにある。つまり、misconceptionの程度の差こそあれ、この「装置」は全ての人間に存在しうる。ある人は、この装置の影響を最小限にとどめるような人格を有しており、またある人は、その装置が過剰に作動するような人格を有しているかもしれない。これは、Bion（1957）が、あらゆる人間の人格について、その機能を精査するために「精神病部分」と「非精神病部分」の二つに分けたことに類似している。ただ、misconceptionはより認識論的次元の探求を図っている点で、新たな観点による概念であると捉えることができるだろう。

では、より具体的にmisconceptionの概念を示すために、以下に調査面接による事例を取り上げ、そこに現れるmisconceptionについて考察を試みることにする。

6.事例[4]

ここで紹介するAさんは８０歳の男性である。歳の離れた妻との二人暮し。幼少期についての詳しい報告はないが、いわゆる戦時中の都市近郊部に生まれ育ったということ。青年期は太平洋戦争の時期で、Aさんは空軍の特攻隊に属していた。時代背景もあり、“死”のことを考え続ける青年時代を送った。実際の特攻にも参加することになり、特攻中、自身が乗っていた突撃機の偶発的事故により、奇跡的に生還す

ることになった。結婚は大戦後。今の奥さんと結婚、二人の子どもをもうける。しかし、二人目の子どもを生んだ直後、奥さんは難病に罹患、以降それが原因で言語障害などの器質性障害が残ることになった。それ以来、奥さんと子どもを皆、自分一人の背に抱えながら生活していった。子ども達の前では、Aさんはとても厳しい父親だった。また、戦後から最近まで、一つの会社に勤め続け、体を張って奉仕した。小さな会社で、創業時から関わっていたために、損な役目は自分一人で何とかしていった。例えば、仕事の取引のために、英語が話せないにもかかわらず、単独でアメリカに乗り込み、ダウンタウンをさまよい死を覚悟するような状況に追い込まれたが、運良く取引も成功し、日本に帰って来たことなど。そのような性格のため、向こう見ずに取引に挑むことも何度か有り、ヤクザ関係の人間に絡まれることも度々だった。結果的にその手腕が信頼され、最後は取締役にまで昇進した。現在、その会社は退職し、職業にはついていない。癌は面接より一年前に発覚、続いて面接より１１ヶ月前と６ヶ月前に摘出手術を受けた。癌は直腸癌で、ステージは不明だが早期ではないということ。

以下、Aさんとの面接内容の一部を提示する。

①癌の体験過程

《基礎情報を尋ねていく段階で、ステージのことを尋ねたときAさんは次のように語った》。「ステージは聞いていない」。〈早期癌とかっていうのも〉。「聞いてないからわからないけど、早期じゃない。大分頑張ったからねー。悪いの承知で」。〈ああ、じゃあもう〉。「（言葉を切るように）うん。癌で死のうと思ったからね」。〈えっ？そうな〉。「（Inの言葉を切るようにして）ああ。どうせ死ぬんならねえ。死亡率の高いねえ。それで死ぬのが一番ええやろうと思ってね」。癌であることはずっと前からわかっていたが、去年の７月まで限界だと思うまで仕事を続けた。「末期癌でね。もう医者がみつけたときには遅いというようなくらいになるまで頑張ろうと思っとったんよ。ところが、頑張りきれなかった。残念ながら」。〈じゃあ、告知を受ける前に自覚をしていた〉。腸が詰まってくるなどの症状が明らかだったから、自覚はしていた。「楽しんでいたんですよ。癌がじわじわ広がるのを」。「そういうのはあかんのかな。回答としては」。〈いやいや そう そうかあ〉。「要するに生きすぎたって感じなんですよ」。〈生きすぎた〉。「うん、もう８０でしょう。７９まで仕事しとったんやからねえ。することもうしたから、これ以上生きても恥さらすだけやと。だから、なんとかすっと逝きたいと思っててね。ほんで、癌もよし。こういう感じ」。〈じゃあ、癌が自分の中にあるっていうのが分かってもそんなに怖くない〉。「怖くない怖くない。むしろ楽しんでたねえ。早く大きくならんかなあって。そやけどねえ。宣告されるのは嫌やから」。〈癌があることはわかって、怖くないけど、宣告されるのは嫌〉。昔から、医者にかかったことがなく、それ自体が嫌だったので、癌が分かっても医者の所に行くことは非常に嫌だった。しかし、告知の際、ショックは全くなかった。「ああ、そう。それは良かった。ワシはそう思ってたよ」。「せっかくできた癌やからねえ。もっと大きくさせてねえ。とにかく一緒に逝きたかったんですよ」。〈癌と一緒に？〉。「そう、癌と一緒に。離すのも嫌やった」。

②死について・生について

戦争の時に、志願して航空部隊（特攻隊）に入った。戦争には猛烈に反対していたが、当時の時代状況においてはそれを前面に表すことができなかった。兵役を忌避できない状況に追い込まれたとき、特攻隊の他は想定できなかった。敵とはいえ、人間を殺すことはできない。そうなれば、自分が死ぬしかない。実際、突撃命令が下ったとき、敵を対象とせず、何もない地面に向かって突撃していった。結果、奇跡的に助かり、命を取りとめ、負傷兵として戦争を生きながらえることができた。その時分から、死を具体的に考えはじめ、いつも如何に死ぬかということを考え続けた。〈死に対して、恐怖は感じませんか？〉。「怖いっていうのはなあ 逆に楽しいねえ。死っていうのは」。そのような態度を死に対して持ち続けてきた。

齢を重ねた今、死よりも逆に生きることに対して苦しみを覚える。今まで、誰にも「誰の世話にもならずに」生き抜いてきた自負があるから、今から歳で体が弱り、経済的にも衰え、人に迷惑をかけていくことに対しては耐え難い気持ちを覚えている。「これ、何年生きんといかんのやろうって、その方が、今、苦しい」。だからといって、信念上、自殺はできない。だから、今、迷惑をかけないうちに如何に死ぬかを模索中である。〈じゃあ、生きるっていうのはどんな感覚です？〉。「生きるってね。そうやな

あ、今のところ惰性で生きてるなあ」。生きるにしても、人に迷惑をかけないような形で生きるようにしている。

③支えてもらった人

「癌で人に助けてもらったっていう覚えはないねえ。迷惑をかけられた覚えならいっぱいあるけど」。〈家族とかは・・・〉。「ワシは癌については、自分一人でどうにかしたと思っとるからねえ。まあ、支えてもらったっていうなら、癌に限ることじゃないが、酒やねえ。やっぱり」。《Aさんはこの話をした後で、有能感を表すエピソードを語りはじめた。》

面接は1時間強にわたって行われたが、その間中、上記のように語るAさんに面接者は圧倒されていつつ、何か苦痛な感じを体験していた。上記以外の面接内容も含め、Aさんが語る内容の殆どが、面接者にとって極論に聞こえ、特に上記の場面では頭の中が混乱させられるような感覚を覚えていた。Aさんに面接者は、万能的な感じと、差し迫る感じ、厭世的な感じ、特にそれらのものがない混ぜになった雰囲気を覚えながら、面接は行われていった。

7．事例の考察

以前の論文（西村2001b）で、同じ事例を検討した際、筆者はナルシシズムの観点からこの事例の考察を行ったが、本論では、misconceptionの観点からこの事例を再検討することにする。

まず、検討を行う前におさえておく必要があるのは、癌という体験がAさんにもたらした衝撃の強さである。筆者は前研究において、癌という病いが個人に与える衝撃の大きさは、時にそれを患う個人の人格全体に大きく影響を与えることを示した（西村2001b）。つまり、前述のMeltzerによる精神的苦痛の分類で言えば、癌が個人にもたらす精神的苦痛は“迫害的精神的苦痛”あるいは、“混乱的精神的苦痛”となる可能性が高い。多くの場合、癌を体験する個人は、自己存在を根源から脅かす苦痛を味わい、考える能力や機能を脅かす苦痛を経験することになるのである。

このような状況におかれた個人は、自らが内在している概念作用あるいはmisconceptionを用いることで、その状況を乗り越えようとする可能性がある。内在している概念作用とmisconceptionの拮抗の程度で、呈する状態像は変わってくるのかもしれない。癌の体験の場合は、その精神的苦痛があまりに多大であるために、状況如何では、癌を患った人は内在している概念作用（抽象化した形では、コンテナー・コンテインドの機能）では対処できない可能性がある。Kubler-Rossを持ち出すまでもなく、筆者の以前の研究においても、被面接者の癌体験者全員が、少なくとも癌の告知を受けた直後は、それまでの世界の自明性の喪失体験、そう銘打つに相応する不安体験、妄想－分裂態勢ともいうべき心の状態を呈していたことを示した（西村2001b）。これをmisconceptionの観点から読み替えれば、癌のような圧倒的な精神的苦痛を経験するとき、人間は、概念作用の代替物として、misconceptionという装置を用いることにより、どうにか精神的破綻を避けようとする機制をその精神内に所持している可能性を示すことができよう。Aさんもそのようにして癌による精神的苦痛を経験しているのかもしれないと考えられる。Money-Kyrleは殆どの人間の精神内にmisconceptionの存在を認めたが、ある状況においては、人間はmisconceptionという「装置」を内在しているからこそ、精神的破綻、人格の崩壊を免れることができるのではないだろうか。これについては、本論では推論の段階で留めておく。次に、具体的にAさんの中に見受けられるmisconceptionの影響について考察していく。

Aさんのmisconceptionの影響は、やはり癌そのものに対する捉え方に顕著である。Aさんは癌について、自分が癌であることを予め知っており、それを「育てていた」と語っている。そして癌が悪化していくのを「楽しみにしていた」とも述べている。Aさんのmisconceptionがここにおいて、3つの機能を果たしている可能性を示唆できる。一つ目は、投影同一化により、自らの破壊的部分を癌という対象に投げ入れ、同一化している可能性である。そうすることで、自らは癌となって、残された弱い部分、つまりここではAさんの“生きる”という部分に優位に立とうとしているようにも見ることができるかもしれない。二つ目は、展望の反転により、Aさんは、癌によって「苦しい」という展望を反転させて「苦しくない」状況、

「楽しい」状況を作り出している可能性である。癌という病気そのものに対しても、自分の命を蝕む悪い病気というある種の客観的事実を反転させて、自分が望む死に導いてくれる良い病気というように捉えているようである。その状態におけるAさんは恰も癌を希求しているようにみえる。3つ目は、無意識的幻覚によりAさんは、自らを苦しめる癌を万能的にコントロールし、そうすることにより、自分の余命さえも支配できるという万能的空想を創り上げている可能性である。ここにおいては、癌は、Aさんの心的現実の中において、Aさんを苦しめたり怖がらせたりするものではなくなり、むしろ手の内で転がせる程度のものに弱体化されることになっているのかもしれない。

この癌の捉え方に見受けられるAさんのmisconceptionの作用の構造を基礎にすると、この構造が如何にAさんの物事の捉え方に広範な影響を与えているか、つまりmisconceptionが如何にAさんの精神状態に作用しているかを窺うことができるだろう。例えば、死に対する捉え方である。展望の反転により、Aさんは死＝楽―生＝苦としてとらえているようである。おそらくここには癌の影響を垣間見ることができ、Aさんにおいて癌に結びつき近似する観念については、展望の反転が行われている可能性を示唆することができる。

ここで、面接セッティングに問題があることを念頭に、あえて、Aさんと面接者である筆者との関係におけるmisconceptionの影響の検討を試みる。面接者はAさんと面接している間、圧倒感と混乱、苦痛を感じていた。一方、目の前のAさんは揚々と語っていた。精神分析セッティングではないので、厳密にはいえないが、この関係の中でAさんはご自身の苦しさや癌によって味わう圧倒感を分裂排除し、面接者の中に投げ入れた、つまり投影同一化していたとみることができるかもしれない。また、上述のように、Aさんはある意味、こちらの反応を楽しむかのような話振り、あるときは自慢話という形で語っていたようだった。ここにおいて、Aさんは面接者を観察する面接者にとっての“面接者”になっている節がある。展望の反転の可能性である。さらに、面接者の反応を読み取りながら、話を進めていくという万能的に支配するという対象関係、つまり万能的空想に基づいて面接者と対象関係を結んでいた可能性も示唆できるかもしれない。

再び、語りに戻り検討を進める。ここで、Aさんにおけるmisconceptionの中心的な問題をあえて一つに絞り指摘するならば、Aさんが語っている通り、この状態においてAさんは援助対象を求めることができない、あるいは求めていない、という部分が挙げられるかもしれない。Aさんは「誰の世話にもならずに生き抜いてきた」「癌で人に助けてもらった覚えはない」と語っている。援助対象を求めることは、他者の概念作用（♂－♀機能）を期待し、そこに自らが排除していた精神的苦痛の部分を受け入れてもらうことになる。これは、原初的な母―子の関係性に等しく、それによって、人は経験から学び発達を遂げることができるのである。しかし、Aさんのようなmisconceptionが優勢に機能している状態においては、援助対象を求めることは、自らが苦しんでいるということを受け入れることにつながり、それは、misconceptionでつくり上げてきた安定した心的状態を放棄することにつながる。その契機が、精神的破綻の危機を免れるための、精神的苦痛によるものであっただけに、それを放棄することは非常な危険と困難を伴うように感じられる。過剰な精神的苦痛に晒されている場合に、援助対象を求めないことは、認識論的次元から述べれば、“経験から学ぶこと”をしない可能性につながり、そうなると、人格の変化や発達といったものは阻害されるかもしれない。

ただ、Aさんの場合、それが病的であるとか未熟であるという判断は決してできない。むしろ、たいていの人間に存在するmisconceptionの一つの状況に即したあり方を伝えてくれるように思われる。Aさんのライフヒストリーは、Aさんがある種の圧倒的かつ苛酷な環境を生き抜き、misconceptionはそれを生き抜くための一つの手段として使用され続けた可能性があることを裏づけしているかもしれない。今から示すことはこれまでよりもさらに強調して、たいていの人間にmisconceptionが存在していること、そして、個別的にはAさんの内的状況はmisconceptionが優勢な心の状態であるという上述の考察を補強することでもある。上述のとおり、misconceptionが早期乳児期に作られ、心の根元的な所に存在しているならば、それは、過酷な状況に応じて、反復して表れ、同様の働きを示すはずである。

Aさんのライフヒストリー特有なものとして、“死”が各局面で大きく影響していることを挙げることができよう。癌については先述のとおりであるが、同様な心理機制が、例えば、太平洋戦争という過酷な

時代において、Aさんが特攻隊に身を置くことを自ら選択したということに垣間見られる。そこにおいて、Aさんの特異性は、敵を殺すために特攻隊を志願したのではなく、軍隊に入らざるを得ない状況で敵を殺さないために特攻隊を志願したという部分である。これは癌のとらえ方に共通するように思われる。つまり、癌という病を余儀なく体験させられ（戦時における徴兵）、その状況において、Aさんは周りに迷惑をかけず（敵を殺さず）、「死」というものをどうにかしようとしているようである。そのためには、その状況に耐えられる形に“死”自体の概念を自ら作り替える必要、misconceptionを優勢にしなければ耐えられない状況があった可能性が考えられる。また他に、Aさんの結婚後の家族状況（奥さんが難病に罹ったこと）、仕事の状況（損な役割を一人でどうにかした）、それにまつわるエピソード群から想像するに、同様の心理機制を作動してAさんがその体験を経ていったことを示唆できるかもしれない。以上の要素から、Aさんが援助対象を受け入れないのは、Aさんにそれを許さない環境、歴史があったからではないかと推測される。幼少期については語られていないが、戦中の都市近郊部で産まれ育ったという背景を考えるに、男子であることも手伝って、環境の面で依存や援助を求めることが困難だったのではないだろうか。

さらに、ライフヒストリーを加味し、現状のAさんを考えると、Aさんがmisconceptionを作動させるその背後には、何かしら“死”の影がつきまとっていることを示すことができるだろう。死の恐怖という精神的苦痛に直面したとき、Aさんはそのさなかで生き残るために、misconceptionを作動し、単独で生きることを試みているようである。たしかに、この部分は程度の問題はあるが、Aさんが経験から学ぶことを阻害しているかもしれない。しかし、はたして、我々はその是非を問うことができるのだろうか。

Money-Kyrle（1968）はmisconceptionによる心的状態を精神分析により修正するか否かは、その本人が置かれている状況と本人の判断によって、決定されるべきで、修正したほうが正しいという判断は決してできないと述べた。彼はmisconceptionを提示した3年後に、misconceptionと死の恐怖の関連の強さを主張している（Money-Kyrle1971）。そこで彼は、人間は死の恐怖に直面したとき、それをそのまま一人の力により体験することはある意味不可能であり、ある者は他の人間の援助を求め（原型として乳児が乳房、あるいは母親を求めることが挙げられる）それを体験していくが、ある者はmisconceptionによりそれを体験していくと述べた。死の恐怖はたとえ十分に機能する思考機能、概念作用を獲得していても、その作用を停止させmisconceptionを作動させるほどのインパクトを持っているのである。Money-Kyrle（1971）は獲得している思考力が成熟していれば、このインパクトによるmisconceptionはさほど大きなものではなく、永続するものでもないと述べるが、死の恐怖に繋がるインパクトを受けている最中、直後は、殆どの人間はmisconceptionを内在しているだけに、それが非常に優勢に働く精神状態を呈するのではないだろうか。Aさんは死の恐怖が身近であった時代を生き抜いた。そしてAさんは今まさに癌という病いの中、死の恐怖の只中にいる。我々はなによりもまずそこを理解しなければならないだろう。つまり、misconceptionが作用する心の状態を考えるとき、それが作用せざるを得ない精神的苦痛をその個人が直面しているということから目を離してはならない。前述の通り、misconceptionという概念は、人間の精神的苦痛を理解しようとする試みの元に生み出された概念なのである。

Aさんの事例は、人間が有するmisconceptionの作用を、明確に示してくれる価値ある事例である。Aさんの事例は、精神病に限らず、我々は誰でも心のどこかにこのmisconceptionが作用する部分を持っており、それは我々の心に強く作用する可能性があることを伝えてくれる。少なくとも提示した事例におけるAさんの心の状態を理解するためには、misconceptionの作用する部分を吟味する必要がある。さもないと、Aさんが経験している精神的苦痛を無視してしまうことになりかねない。我々は誰しもmisconceptionを内在しており、死に向かっている存在である。Aさんは、そういった存在である我々に、その一つの生き様というものを伝えている。Aさんは、我々臨床家にとても重要なことを教えてくれているように思われる。

8．結論

本論では、misconceptionの概念とは如何なるものか、その位置付けと性質、そしてその重要性を述べてきた。筆者は、この概念の性質を明示し、その重要性を述べることをもって、セラピストが、認識論的次

元においてクライエントを援助しようとする際、その精神内界におけるmisconceptionの作用を吟味することが非常に重要な所作であることを示唆したつもりである。さらに、ここで改めて、クライエントのmisconceptionを把握すること、それ以上に、セラピスト自身が、自分自身の内界に存するmisconceptionの作用する部分を十分に把握しておく必要を訴えておきたい。

松木（2002）は、Money-Kyrleの提示したmisconceptionを参考に、「ネガティブα機能」[5]という概念を提示した。ネガティブα機能とは、端的に述べれば、人間の中に内在するmisconceptionにより、対象について考え、応じる現象を示す。分析者側のネガティブα機能を例に挙げるならば、分析状況において次のことが生じる可能性がある。分析者のネガティブα機能とは、分析者自身の心の根幹部分に内在しているmisconceptionが優勢な状態におり、患者を考え理解しようとする現象そのものを示すことになる。ネガティブα機能により得た患者に関する理解は、患者自身が訴えかけるものとはかけ離れたものになっている可能性が高い。それは行為として、分析者自身の行動化、過剰な情動的反応として表れるかもしれない。これは、患者に貢献するどころか、患者の考える過程を阻害し、考える機能を障害する可能性をもつため、分析自体にとって非常に重大な問題を生じさせる危険性を孕む。

ここで必要となるのは、分析状況において、分析者はネガティブα機能を働かせないようにするということである。ただ、本論で述べてきたように、misconceptionは心というものを構成する早期乳児期に生じ、心の構成要素となるものだけに、それを取り除くということは不可能である。それでは、諦めるしかないかと言えば、そうではない。misconceptionの作動を防ぐ補足的な構造を心の中に築き上げることが重要となってくるのである。松木によれば、分析家は教育分析やその後の自己分析によって、自己に内在するmisconceptionを精査し、それを補償する構造を新たに創り上げることで、それが可能となるという[6]。分析者も例外なく、misconceptionを内在化している人間であり、それだけに分析空間においては、自らのmisconceptionで患者（分析状況）に応じないよう、つまりネガティブα機能で分析をしないよう最大の努力を注ぐべきなのだろう。

上述は、精神分析のみに限ることではない。心理療法は言わば、セラピスト自身を道具にしてクライエントに貢献する技術である。セラピストが道具の性質を知らずして、道具を有効に使いクライエントを十分に援助できるわけがない。心理療法は一つの側面として、クライエントがセラピストという道具を使用しながら、自らについて考え、知っていく作業ということができる。これは決して知的な側面のみを言っているわけではない。情動的側面、情動的なつながりについても、それについて考えるという機能を働かせなければ、人は経験から学ぶことができないのである。心理療法の中で、クライエントの考える機能を高め、そして情動的経験から学ぶことを援助していく上では、この“考える機能”自体を精査していく過程は心理療法そのものにとって、必要不可欠な作業であろう。したがって、心理療法を提供する役割を担うセラピストが、自らのmisconceptionを精査し、自らの歪みを知っていくことは、その根幹に関わる重要な要素なのではないだろうか。

9．今後の展望と課題

最後に、misconceptionについて今後の課題と発展の展望を挙げておく。まず、misconceptionを実際の臨床場面でどのように扱っていくかについて本論では述べることができなかったので、今後の課題として取り上げておく。臨床場面でそれを見出したとして、それをどのように扱っていくかを問うことは非常に重要であると思われる。次に、これは発展の展望であるが、以下のことを考えている。筆者は以前より、ナルシシズムの理論の精緻化を図ってきたが、misconceptionは認識論的次元から、その構造理解に新たな視点を投じるのではないかと考えている。殊に、ネガティブ・ナルシシズムについては、その可能性が高いようである。今後の研究方向の一つとして、ナルシシズムをmisconceptionの視点から解析していくことを考えている。

〈注〉

1）misconceptionについて、現時点では、「誤概念作用」（福本1999）、「誤った概念」（松木2002）の二通りの訳語が提示され、統一した訳語は設定されていないようである。よって、本論では、内容上の混乱を避けるため、元の表記のまま提示し、論じていくことにしている。

2）概念と概念作用は異なる心の性質である。前概念作用が概念作用という思考する装置を生み出し、概念作用が概念を生み出す。概念作用は概念を生み出し、使用することで、さらに高次の思考を成し遂げるのである。本論はこの3つの用語について、この定義に基づいて終始論じている。なお、この文脈からmisconceptionを邦訳するならば、“誤った概念作用”“誤概念作用”と訳されるかもしれない。

3）Hinshelwood（1994訳書142頁）によれば、投影同一化には3つの諸形態が考えられる。

・暴力的な、「攻撃的な関係の原型」
・他者の心とのコミュニケーションを意図するより良性の形態
・他者を理解するために他者の心に非暴力的な容で入り込むこと、すなわち共感

この3つは連続体上にあるものとして理解でき、下に行くほど成熟した形の投影同一化ということになる。Meltzer（1966,1967b）の述べる「過剰な投影同一化」はここでは暴力的な、「攻撃的な関係の原型」に分類されるものとみなしても良い。過剰な投影同一化においては、自他の境界が破壊され、混乱が生じることになる。

4）紹介する事例は、精神分析という方法を用いた事例ではない。研究方法として筆者は「深層心理学的考察を目的とした調査面接」（西村2002）という方法を採用している。この方法の詳細については筆者の別論文（西村2002）を参照していただくことにして、本研究では詳しく取り上げることはしない。ただ、この論文にて、筆者は、調査面接法という方法を用いた素材に対して、精神分析理論を用いて考察することが有効であることを論じたことをここに明記しておく。なお、以下に挙げる事例は「癌体験者の内的世界に関する臨床心理学的研究」（西村2001b）において、調査し、検討した事例の一つである。したがって、調査面接に際して、筆者は癌の体験内容を語ってもらうという立場で面接を進めている。以下の内容提示が逐語的になっているのは、面接内容を録音したものをできるだけ忠実に掲載したためである。また、事例提示の際、本来ならば、敬称、敬語を用いて記載するべきところかもしれないが、文章理解の便宜のため、敬語を用いずに述べた。

5）α機能とは、概念作用conceptionにより、対象あるいは自らの心の状態（特に情動）を考え、それに意味を付与し、考える素材thoughtを作り出していく精神機能を示す。これによって、人間は自らの情動を考えるthinkingことができるようになる。これは、早期乳児期に母親との関係で赤ん坊が内在化を遂げる機能である。

6）これは、一方で、分析という作業により、患者にも同じプロセスを築くことの重要性を示唆している。

〈参考文献〉

Bion, W.R.1957 “Differentiation of the Psychotic from the Non-Psychotic Personalities.” Int. J. Psycho-Anal., 38:266-275

Bion, W. R.1958 “On Hallucination.” Int. J. Psycho-Anal., 39:341-349Bion, W.R. 1959 Attacks on Linking. Int. J. Psycho-Anal., 40:308-315

Bion, W. R.1962a “The Psycho-Analytic Study of Thinking.” Int. J. Psycho-Anal., 43:306-310

Bion,W.R.1962b.Learning from Experience.William Heinemann Medical Books.福本修訳『精神分析の方法 Ⅰ〈セブン・サーヴァンツ〉』法政大学出版局 1999

Bion,W.R.1963.Elements of psychoanalysis.William Heinemann Medical Books.福本修訳『精神分析の方法 Ⅰ〈セブン・サーヴァンツ〉』法政大学出版局 1999

Bion,W.R.1965.Transformations,William Heinemann Medical Books,福本修・平井正三訳『精神分析の方法Ⅱ（セブン・サーヴァンツ）』．法政大学出版局2002

Bion,W.R.1970.Attention and Interpretation,Tavistock Publication,1970. 福本修・平井正三訳『精神分析の方法Ⅱ（セブン・サーヴァンツ）』．法政大学出版局2002

Caper, R. 1996 “Play, Experimentation And Creativity.” Int. J. Psycho-Anal., 77:859-869

Caper, R. 1997. “A Mind Of One'sOwn.” Int. J. Psycho-Anal., 78:265-278

Caper, R. 1998. “Psychopathology and Primitive Mental States” Int. J. Psycho-Anal., 79:539-551

平井正三.1999「愚かさとその対象関係：知的障害を持つある少女との精神分析的心理療法」『心理臨床学研究』Vol17.No.5 442-453頁

Hinshelwood,R.D.1989.A Dictionary of Kleinian Thought,Free Association Books,London.

Hinshelwood,R.D.1994.Clinical Klein. The Cathy Miller Rights Agency ,London.福本修・木部則雄・平井正三訳.『クリニカル・クライン』.誠信書房 1999

福本修.1991「ビオンのメタ心理学」.『精神分析研究』.Vol.35.No.3 200-212頁

Meltzer,D.1966. "The relation of anal masturbation to projective identification." Int. J. Psychoanal. 47

Meltzer,D.1967a. "Terror,persecution,dread-a dissection of paranoid anxieties." Melanie Klein Today,Volume1.edited by Spillius,E.B.230-238.The Institute of psycho-Analysis,London.世良洋訳.「恐怖、迫害、恐れ—妄想性不安の解析」『メラニー・クライントゥデイ②』.岩崎学術出版社.1993

Meltzer,D.1967b.The Psycho-Analytical Process.The Roland Harris Trust Library.

Meltzer,D.1976. "A psychoanalytic model of the child-in-the —family-in-the-community. " Sincerity and other works collected papers of Donald Meltzer karnac books ltd. 1994pp387-454

Meltzer,D.1981. "Does Money-Kyle's concept of misconception have any unique descriptive power?" Sincerity and other works collected papers of Donald Meltzer karnac books ltd. 1994pp496-513

Meltzer,D.1983.Dream-Life.The Roland Harris Trust Library.

Meltzer,D.1988.The apprehension of Beauty.The Roland Harris Educational Trust.

松木邦裕1990「クライン派精神分析における人格病理、とりわけ、人格のなかの心的構造体についての研究の展開」.『精神分析研究』.Vol.34.No.2. 81-91頁

松木邦裕.1991a「ベータ要素の臨床応用の試み」.『精神分析研究』.Vol.35.No.3. 213-223頁.

松木邦裕.1991b「Bionは語る」.『精神分析研究』.Vol.35.No.3. 244-247.頁

松木邦裕1995「ナルシシズムの様態：自己愛から自己愛対象関係へ」.『精神分析研究』.Vol.39.No.3.150-158.

松木邦裕.1998「分析空間での出会い」.人文書院.

松木邦裕.2002 「治療者のアルファ機能と解釈－アルファ機能対象とネガティヴ」松木邦裕『分析臨床での発見』岩崎学術出版社92－115頁2002

Money-Kyrle, R. 1952 ".Psycho-Analysis and Ethics." Int. J. Psycho-Anal., 33:225-234

Money-Kyrle, R.1956. "Normal Counter-Transference and Some of its Deviations." Int. J. Psycho-Anal., 37:360-366

Money-Kyrle, R. 1968 "Cognitive Development." Int. J. Psycho-Anal., 49:691-698

Money-Kyrle, R. 1971 "The Aim of Psychoanalysis." Int. J. Psycho-Anal., 52:103-106

Money-Kyrle, R. 1979. "Looking Backward -forwards." Int. R. Psycho-Anal., 6:265-272

西村理晃.2001a「ナルシシズムの三次元論的解釈への試論」『大阪大学大学院人間科学研究科心理教育相談室紀要』Vol.7.

西村理晃.2001b「癌体験者の内的世界に関する臨床心理学的研究」大阪大学大学院人間科学研究科修士論文

西村理晃.2002 「深層心理学的考察を目的とした調査面接に関する方法論的検討」『日本心理臨床学会第21回大会発表論文集』

Rosenfeld,H.1965.Psychotic States. Maresfield Library,London.

Rosenfeld,H.1987.Impasse and Interpretation. Tavistock.London.

Rosenfeld,H.1988. "Contribution to the psychopathology of psychotic states" Melanie Klein Today,Volume1.edited by Spillius,E.B.239-256.The Institute of psycho-Analysis,London.松木邦裕訳.「生と死の本能についての精神分析理論への臨床からの接近」『メラニー・クライントゥデイ②』.岩崎学術出版社.1993

Steiner,J.1987 "The interplay between pathological organizations and the paranoid-schizoid and depressive positions" .Melanie Klein Today,Volume1.edited by Spillius,E.B. 324-350.The Institute of psycho-Analysis,London.世良洋訳.「病理構造体と妄想—分裂態勢、抑うつ態勢の相互作用」.『メラニー・クライントゥデイ②』岩崎学術出版社. 1993

Steiner,J.1990 "Pathological Organizations as Obstacles to Mourning.The Role of Unbearable guilt" .Int.J.Psycho-Anal.Vol.71. 87-94.

渡辺明子.1991「ビオンという真実」『精神分析研究』.Vol.35.No.3.183-192.頁

A study on Money-Kyrle's concept of misconception

NISHIMURA Masaaki

"Function of thinking" is an elemental function of the human mind, which controls their emotional experiences. Therefore, enhancement of "function of thinking" for clients is an essential work in psychotherapy, especially in psychoanalysis. In the psychoanalytic model of psychotherapy, realizing and acquiring the analyst's "function of thinking", a client learns to dig into his/her mind and existence by improving(enhancing/elevating) his/her own "function of thinking". In this point of view, "function of thinking" plays an important role in the field.

In this paper, the author focused his attention on misconception, developed by Money-Kyrle known as Kleinian psychoanalyst, as a new conceptual tool in order to shed a light on exploration of "function of thinking" in psychoanalysis. However, the conceptual content of misconception has been vague since it was proposed. The author clarified the concept of misconception by discussing historical psychoanalytic theories and exemplifying a case study. misconception is "distorted function of thinking" in the nucleus of their mind. It should be called "distorted apparatus for thinking that produces misunderstandings, wrong recognitions, etc. The author believes that misconception is a significant and remarkably effective concept for psychotherapists, who explore client's mind profoundly to support their psychological development and help clients to introspect their own existence, especially their "function of thinking".